

# 佐藤春夫

## 最後の文豪

日本文学史上に燦然と耀く浪漫の巨星、佐藤春夫――。

無尽蔵の詩精神をもって詩歌や小説をはじめ、童話・戯曲・文学評論・随筆・翻訳などあらゆる文芸ジャンルを自由に往還しつつ、あまりに浪漫的であまりに巨大な文学の殿堂を築き、さらに「門弟三千人」を誇るなど奔放にして華麗なその生涯。佐藤春夫は、文豪と称するにふさわしい最後の一人である。

この文豪こそが、新学社の初代総裁である。

そもそも新学社との関係は、佐藤が保田與重郎の師であったことによる。保田は大学生の頃より佐藤に師事し、昭和十五年には作家論として『佐藤春夫』を上梓するなど、自らが考える日本近代文学観の上で最高峰の文人として、敬慕と信頼の念は終生変わることがなかった。佐藤の前では膝を崩すことなく、常に威儀を正したという。



佐藤春夫

明治25年（1892）4月9日生  
昭和39年（1964）5月6日歿

## 『規範国語読本』の刊行

佐藤春夫と新学社との関わりは、その最晩年の数年のことになる。

まず特筆すべきは、『規範国語読本』（昭和三十八年四月一日 新学社刊）の監修を務めたことである。そもそもこの企画は、保田與重郎と柳井道弘、そして国文学者の清水文雄の三人による雑誌からはじまった。当時中学の国語教科書の大方が国語力を培うには低い内容であり、情緒・情操を養うに乏しいものであったことが話題になり、それなら良質の国語読本をつくらうと、保田が企画・編纂を自らかってきたのである。清水は、新学社と『新研究』の監修者・三登義雄の橋渡しをした、創業以来の大きいなる賛助者だった。

保田が誌したその「まえがき」には、『規範国語読本』の内容は、わが国が近代国家として世界に登場した時代の文章の精神をあつめ、その時代の精神と意志と態度を学ぼうとするものであります」と丈高く謳われている。森鷗外・島崎藤村・土井晩翠・吉井勇・萩原朔太郎・佐藤春夫といった文学者の作品のみならず、中江藤樹についての内村鑑三の小文や、世界的細菌学者の北里柴三郎を描いた志賀潔の文章、或いは、戦前ならば誰もが知っていたシベリア単騎横断の福島安正の紀行文などユニークな作品も収録され、時を経ても色あせない多様な内容を誇っている。

保田は、収録作品の選定のみならず「解説」や「問題のしおり」、下段の注に至るまで、すべてを自ら行なったのである。監修者の佐藤も、「日本語の美しさ」という簡潔明瞭なる名文を寄せている。

『規範国語読本』は、国の将来を思う文人の師弟が志業として編んだ最高の国語教科書だった。



▶『規範国語読本』

（昭和38年4月1日 新学社刊）

装画・カットは棟方志功。表紙は、現在本社玄関ホールに掲げられている板画「垂狩猿」

◀昭和38年1月『規範国語読本』編集の打合せをする佐藤春夫と保田與重郎。東京都文京区の佐藤春夫邸にて





◀ 昭和39年4月4日、総裁推戴式にて挨拶する佐藤春夫（都ホテル・葵殿）

▼ 昭和39年4月4日、総裁推戴式の後に行なわれた「日本教材文化研究所」の会合



よりも偉いのだ」と大喜びした。「新学社のような小さな会社の総裁になっていただいて申し訳ございません」と言えば、佐藤は「いや、オソウザイ（惣菜）だよ」と大笑いするのだった。

翌昭和三十九年四月四日、社員とその家族の集まったなか「総裁推戴式」が盛大に挙行された。さらに式典のあとには、学者の諸先生方参集のうえ、「日本教材文化研究所」設立の会合があり、そこで佐藤春夫が初代所長に就任したのである。「日本教材文化研究所」とは新学社初の研究機関であり、財団法人「日本教材文化研究財団」の前身である。また、この会合の席で初めて、佐藤と平澤興ひらさわ ちかむねが記念碑的な出合いを果たした。

しかし、思いもかけず、昭和三十九年五月六日、佐藤春夫は急逝する。総裁就任の僅か一カ月後のことだった。

佐藤の登板が、当時社員数五、六〇名ほどの小さな出版社に与えた自信と誇りは計り知れない。そして、出立したばかりの新学社の信用醸成、社会的評価の確立の上で、大いなる貢献を果たしたのである。



▶ 昭和38年9月24日、保田與重郎は佐藤春夫を、郷里の桜井市にある石位寺に案内。佐藤の両脇を奥西・高鳥が支えている。奥西は佐藤の「京都の息子」として親しく仕え、逝去後、千代夫人より形見として愛用の着物一揃えを贈られた。高鳥はその死を悼み、「日本のめでたき春のほごうたはつひにきこえずなりにけるかな」などの連作を献詠した

### 日本一の総裁誕生

佐藤春夫は『規範国語読本』発刊後の昭和三十八年九月二十二日に紀州白浜で行なわれた特約店の全国大会にも出席、言葉がそのまま小説となるようなその講話に、特約店二〇〇余人はひとしく酔いしれた。

そして同じ年の冬のある日、佐藤は、「わしが総裁になってやろう」と自ら名乗りをあげるののである。冗談から出た駒というような成り行きだった。社員はみな、「日本で一番小さい会社に、日本で一等偉い総裁が誕生された」、「うちの会社の総裁は日銀総裁

▶ 昭和38年9月22日、第2回新学社特約店全国大会に佐藤春夫・保田與重郎は夫人同伴で臨席（紀州白浜「古賀の井」）



▶ 昭和41年5月6日、佐藤春夫三回忌に際し、保田與重郎が中心となり、京都の知恩院に本墓を建立。その墓前開眼法要にて